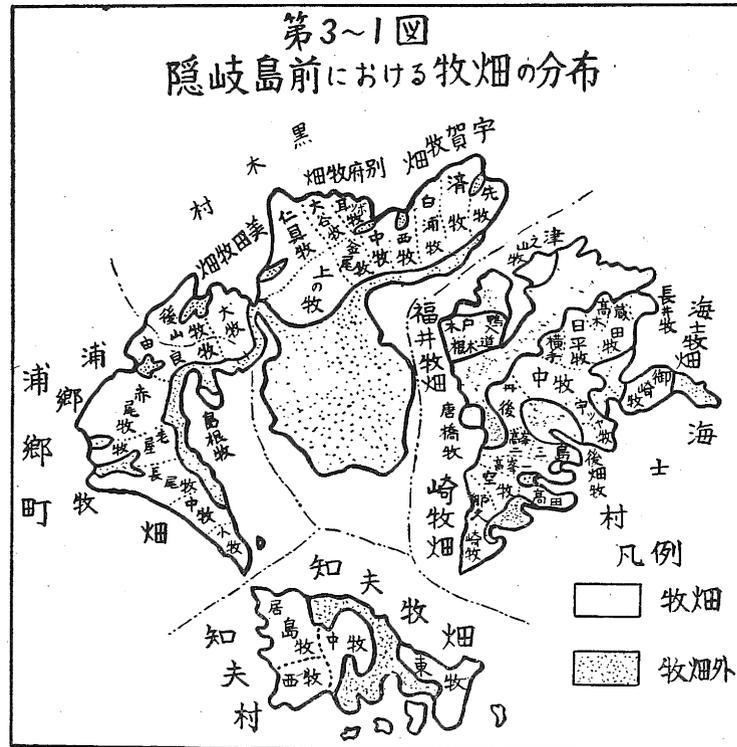


第3章 牧畑の概観

坂 本 四 郎

隠岐牧畑は土地を耕作と放牧に輪換して利用する農業、又は農業経営方式としてつとに有名であり、種々の調査研究の文献が存在する。それ故に牧畑に関する詳しい内容はそれらの文献に譲るべきであるが、本調査報告を読まれる人々の便宜のために一応の概観を述べておくこととする。

- (1) 牧畑の起源 詳しいことについては明かでないが、隠岐の牧が文献に現れたのは吾妻鑑(文治4年、1,188年)のおよそ770年前とされ、また承久の乱(1,221年)による後鳥羽上皇の隠岐御渡島の旧記、遠島物語にもあり、およそ730年前である。しかしその牧は単なる牧場か、牧畑かは不明である。その後慶長12年(1,607年)、およそ350年前牧畑検地があり、「牧畑を四区に分つ」とあつて、明かに牧畑の存在を記録している⁽¹⁾。このように牧畑の存在は古いものであるが、このような経営方式は他に類例を見ない隠岐島独特のものであり、隠岐に自然発生的に生れたものであろうと云う説と、対馬、済州島、五島列島、種子島、屋久島等の離島にも類似の耕作輪換経営方式が存在するとの二説がある⁽²⁾⁽³⁾。



- (2) 牧畑の本質 牧畑は町村又は部落を単位としている。土地を四つに区分して各区を牧と称し、その四区に四年輪作をなすと共に、その作付前後又は休閑中に牛馬の放牧をなす。すなわち一定の土地に耕作と放牧を規則正しく輪換して利用する農業である(才3~1図参照)。
- (3) 牧畑の輪作 普通の牧畑は四牧から構成され、四年輪作となし、その作付順序は次の如く基本型では4年5作であるが、封建時代には4年4作が多く現在では4年3作が多く、なお多くの変型がある(才3~2図参照)。

	才1年(麦山又は本牧, 大小豆山とも云う)	才2年(粟山又は粟稗山)	才3年(空無山又は大小豆山)	才4年(空山)
4年5作	大小麦 — 大小豆	粟 (稗, 黍)	豌豆(大蚕豆) — 大小豆	休 閑
4年4作	大小麦 — 大小豆	粟 (稗, 黍)	休 閑 — 大小豆	休 閑
4年3作	大小麦 — 大小豆	休 閑	休 閑 — 大小豆	休 閑

才3~2図 牧畑の耕作と放牧の輪換

牧地 年 月	第一牧			第二牧			第三牧			第四牧		
	畑	草地	林地	畑	草地	林地	畑	草地	林地	畑	草地	林地
第一 年	12	(麦山)	△	(粟山)	△	(空山)	△	(空山)	△	(空山)	△	△
	1	大小麦	△	放牧	△	放牧	△	放牧	△	放牧	△	△
	2	大小麦	△	放牧	△	放牧	△	放牧	△	放牧	△	△
	3	大小麦	△	放牧	△	放牧	△	放牧	△	放牧	△	△
	4	大小麦	△	放牧	△	放牧	△	放牧	△	放牧	△	△
	5	大小豆	△	放牧	△	放牧	△	放牧	△	放牧	△	△
	6	大小豆	△	放牧	△	放牧	△	放牧	△	放牧	△	△
	7	大小豆	△	放牧	△	放牧	△	放牧	△	放牧	△	△
	8	大小豆	△	放牧	△	放牧	△	放牧	△	放牧	△	△
	9	大小豆	△	放牧	△	放牧	△	放牧	△	放牧	△	△
第二 年	12	(粟山)	△	(空山)	△	(空山)	△	(麦山)	△	(麦山)	△	△
	1	放牧	△	放牧	△	放牧	△	大小麦	△	大小麦	△	△
	2	放牧	△	放牧	△	放牧	△	大小麦	△	大小麦	△	△
	3	放牧	△	放牧	△	放牧	△	大小麦	△	大小麦	△	△
	4	放牧	△	放牧	△	放牧	△	大小麦	△	大小麦	△	△
	5	放牧	△	放牧	△	放牧	△	大小麦	△	大小麦	△	△
	6	放牧	△	放牧	△	放牧	△	大小麦	△	大小麦	△	△
	7	放牧	△	放牧	△	放牧	△	大小麦	△	大小麦	△	△
	8	放牧	△	放牧	△	放牧	△	大小麦	△	大小麦	△	△
	9	放牧	△	放牧	△	放牧	△	大小麦	△	大小麦	△	△
第三 年	12	(空山)	△	(空山)	△	(麦山)	△	(粟山)	△	(粟山)	△	△
	1	放牧	△	放牧	△	大小麦	△	放牧	△	放牧	△	△
	2	放牧	△	放牧	△	大小麦	△	放牧	△	放牧	△	△
	3	放牧	△	放牧	△	大小麦	△	放牧	△	放牧	△	△
	4	放牧	△	放牧	△	大小麦	△	放牧	△	放牧	△	△
	5	放牧	△	放牧	△	大小麦	△	放牧	△	放牧	△	△
	6	放牧	△	放牧	△	大小麦	△	放牧	△	放牧	△	△
	7	放牧	△	放牧	△	大小麦	△	放牧	△	放牧	△	△
	8	放牧	△	放牧	△	大小麦	△	放牧	△	放牧	△	△
	9	放牧	△	放牧	△	大小麦	△	放牧	△	放牧	△	△
第四 年	12	(空山)	△	(麦山)	△	(粟山)	△	(空山)	△	(空山)	△	△
	1	放牧	△	大小麦	△	放牧	△	放牧	△	放牧	△	△
	2	放牧	△	大小麦	△	放牧	△	放牧	△	放牧	△	△
	3	放牧	△	大小麦	△	放牧	△	放牧	△	放牧	△	△
	4	放牧	△	大小麦	△	放牧	△	放牧	△	放牧	△	△
	5	放牧	△	大小麦	△	放牧	△	放牧	△	放牧	△	△
	6	放牧	△	大小麦	△	放牧	△	放牧	△	放牧	△	△
	7	放牧	△	大小麦	△	放牧	△	放牧	△	放牧	△	△
	8	放牧	△	大小麦	△	放牧	△	放牧	△	放牧	△	△
	9	放牧	△	大小麦	△	放牧	△	放牧	△	放牧	△	△
10	休	△	大小豆	△	放牧	△	放牧	△	大小豆	△	△	

- (4) 牧畑の耕作面積 昔は牧畑の大部分は階段状の畑となっており、耕作できない急峻な所や岩石の多い所が林地、草地、荒廢地になつていてその面積は少なかつた。しかし近年牧畑が

衰えて林地が拡大し、耕作される面積は減少して、多い牧畑で20~40%耕作されているにすぎない。その耕作される耕地内でも大小麦は緩傾斜の段畑の岸まで作付され、その面積は広いが、大小豆の作付は段畑の平坦部のみであり、従つて作付面積は麦作の30~50%である。粟、稗は近年作付を廃止するもの多く、その作付は少くなり麦作付面積の10%に満たない少面積である。

- (5) 耕作権と放牧権 牧畑の土地所有は零細な私有であり、耕作は所有者又はその小作人がなす。しかし放牧権は村民の全部にあり、作付の前後、休閑中の一定期間は共同放牧される。すなわち作付期、収穫期は限定され、いわゆる強制耕作となる。
- (6) 耕作技術 牧畑は急傾斜の山腹にあつて、階段状の幅の狭い、細長い畑からなつている。耕作は畑用の隠岐犁を牛に牽かせて耕起し、反当約1斗の種子が撒播される。除草、中耕、施肥、薬剤撒布はしないのが普通であるが、近年若干の金肥施肥と除草が行われる。かく粗放的経営であるから豊凶の差が大きく、生産量は少ない。特殊な例としては普通畑(牧畑以外の熟畑で、当地方では年々畑、本畑、麻畑、廻中、当畑、開地と云う)⁽⁴⁾より多い場合もあるようであるが、普通は約半分位とされている。⁽⁵⁾
- (7) 放牧の輪換 馬は年間放牧、牛は普通4~11月の約8ヶ月間放牧する。各牧の放牧の期間は年により若干差異があるが、大体次の通りである。但し牛は普通12月~3月まで舎飼する。

粟山	前年11月中旬~5月中旬(空山へ移す), 9月中旬~11月中旬	{ 一部は粟山へ 一部は空山へ 一部は空無山へ移す }
空山	前年11月中旬~9月中旬(粟山へ移す)	
空無山	前年11月中旬~6月中旬(空山へ移す)	

昔は空無山は冬作に豌豆を作付して、放牧はなかつたが、近年冬作を止め、大小豆作付まで放牧される。これを捨空無(すてぐな)と云う(才3~2図参照)。

- (8) 採草 牛の約120日間の冬季舎飼用乾草のための採草が牧畑において行われる。8月中旬から9月にかけて粟山、空無山、麦山において行われる。ことに粟山は最も重要であり、粟、稗作も飼料用に作付される場合が多い。
- (9) 牧畑の耕作と放牧の補合関係 放牧による牛馬の糞尿は耕作のための肥料となり、耕作による耕耘は草生を良好にし、荳科と禾本科作物の輪作は地力維持に役立つ等補合関係があり、粗放な土地利用法でありながら、比較的生産力が高く、巧妙な土地利用方法として今日にまで継続されてきた。
- (10) 牧柵 輪換放牧のため牛馬が他の牧や水田、本畑へ出ないように牧柵が牧の周囲に張り廻されている。又断崖、その他危険箇所へ落ちないように危険防止柵も設けられている。村民の全部は放牧権の代償として牧柵の維持、修繕のための義務を負わされている。また各牧

の適当な個所には水飲場の施設がある。

- (11) 牧司 牧畑における放牧の管理には牧司と云う管理人が各部落で選任され、牧柵の修理個所の発見、異状家畜の発見、発情家畜の発見、家畜の転牧等を任務として時々牧畑を見廻り、それぞれ適当な処理をなす。以前は牧司に本牧司と里牧司の区別があり、若干任務を異にした。両者とも重要な地位で老練な養畜家が選任され、相当の手当を受け権威をもっていたが、近時は若干その地位は低くなっているようである。又近年放牧家畜が全部人工授精であるため特に種付牧司をおく部落もある。
- (12) 牧畑構成の変化 牧畑は四牧で構成されるのが基本型であること前述の通りである。町村単位で一牧畑をもつのは知夫村と浦郷町であり、その他は部落別に単独又は共同で一牧畑をもつ。牧畑の構成には種々の変型が生じた。a) 四牧の内一牧が崩壊して三牧構成となつたもの、b) 草生悪化のため、又は部落からの距離が遠いため、正規の牧の外に補助的な牧を四牧の外にもつ場合がある。その牧を補助牧と云う。c) 面積が広く、草生が良い牧は牧容力が大きく、二つ以上の牧畑の共通牧となる場合もあり、その牧を入会牧と云う。d) また隣合う牧畑の二つの牧が相隣接し、同一時期に放牧する場合その境界の牧柵を取除いて共通牧とする場合があり、これも入会牧と云う。
- (13) 牧畑の衰退傾向 牧畑は昔においては相対的に生産性が高かつたから農家はそれに依存して生活し、隠岐全域に普及していたが、近年他の生産部門が発達したため、牧畑の相対的な生産性は低下し、衰退傾向をとつている。その衰退は地域的には島後の如く殆ど衰退、消滅した所があり、その残存地域を狭めつゝある。残存地域においても各農家における牧畑依存度を低め、従属的地位に下りつゝある。またかゝる衰退は土地利用における牧畑の森林化、草地化、水田及び本畑化による牧畑耕作の減少と放牧と採草への重点移動、労働力利用における漁業、水田、本畑、その他兼業等への逃避として現れている。

引 用 文 献

- (1) 久保佐土美；隠岐ノ牧畑式ノ研究（鳥取農学会報，1の3，別刷）3頁
 錦織 英夫；島の農業形態－隠岐の牧畑式農業経営について－（島根総合開発資料No.9，島根県複製版）5頁
 細川 善麿；隠岐牧畑の展望（島根県総合開発資料No.10，島根県複製版）5頁
 浦 郷 町；隠岐の牧畑（謄写刷），1－2頁
- (2) 錦織 英夫；前掲書，5頁
 細川 善麿；前掲書，5頁
- (3) {三橋 時雄；近世封建時代の隠岐牧畑（社会経済史学，12の9）2頁
 沢村 東平；日本における輪作の系譜（農業及園芸，25の7）875頁
- (4) 錦織 英夫；前掲書，5頁
- (5) 細川 善麿；前掲書，32頁